

◎食のリスクコミュニケーション・フォーラム 2019(4回シリーズ)

『消費者市民の安全・安心につながる食のリスクとは』

第3回テーマ:「メディアからの食のリスクのあり方～市民のリスク誤認をどう解消する？」

【開催日】 **2019年8月25日(日)13:00～17:50 <懇親会(講師を囲む会)>18:00～19:30**

【開催場所】 東京大学農学部フードサイエンス棟 中島董一郎記念ホール

<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/campus/overview.html>

【主催】NPO 法人食の安全と安心を科学する会(SFSS)

【後援】消費者庁、東京大学大学院農学生命科学研究科附属食の安全研究センター

【協賛】一般社団法人食品品質プロフェッショナルズ

【対象】食品関連行政の担当者、食品事業者の広報・お客様相談・品質保証担当、リスク研究者、マスメディア、消費者団体・市民団体、など

【定員】 **先着90名(人気が高いため増員中)**

【講演会参加費】 3,000円/回(当日会場にて現金で申し受けます)

*** SFSS 会員、後援団体(先着1～2名程度)、メディア関係者(取材の場合)は無料**

*** 18時からの懇親会(講師を囲む会)は別途 2,000円/回**

【参加申込み】 http://www.nposfss.com/form_riscom2019.html (8月22日で受付終了)

*** SFSS 会員も各回の参加申込みが必須です(4回自動登録される訳ではありません)**

【お問い合わせ】 SFSS 事務局まで(TEL/FAX: 03-6886-4894、email: info@nposfss.com)

【本フォーラムの主旨】

毎回、食のリスクに詳しい有識者をお迎えし、講師3名(Q&A含み60分)+総合討論(90分):13:00～17:50の構成とします。総合討論では、消費者市民の安全・安心につながる食のリスクコミュニケーションのあり方について、会場からの質問に講師が回答する形で議論します。

【各講師のご紹介&講演要旨】

① **平沢 裕子(産経新聞)**

『メディアが広げる誤情報 課題は記者のリテラシー向上?』

フェイクニュースは、何らかの意図を持って作られた嘘のニュースだが、誤情報はそうとは限らない。書いた記者はまじめに取材し、デスクも内容が間違っていることを理解できないから記事として掲載されるし、誤情報とは思わないからいい記事が書けたと思っていることも多い。その結果、風評被害で泣く人がいても、自分が書いた記事が悪いとは思ってもいないだろう。しかし、SNSが発達し、誰でも情報の発信者となれる今、状況は変わりつつある。日本で起きた風評被害の事例を検討しつつ、食のリテラシー向上のためにこれから何をすればいいのか考えたい。

② 市川 衛(NHK)

『「伝える」から「伝わる」へ ～行動変容を目指す情報プレゼンの極意、教えます』

SNS 上の医療・健康情報に関して、投稿された記事の「数」自体は根拠に基づいた適切なものが大部分にもかかわらず、読まれ拡散されやすいのは圧倒的に「誤解を生む」もののほうである、ということが複数の研究で示されています。SNS・ネット時代の今後、情報発信において論点とすべきは「どんな情報を『伝える』か」から一歩進んで「どうすれば『伝わる』のか」、さらに、「どうすれば情報の受け手にシェアという『行動』を起こしてもらえるのか？」という点に変わっていくのかもしれませんが。情報流通のツールが多様化し続ける今後の発信の在り方について考えます。

③ 小島 正美(元毎日新聞)

『なぜ科学者は市民に負けるのかーメディア・バイアスの実態とその対処法』

なぜ、新聞やテレビ、週刊誌の記事、ニュースはゆがむのか。なぜ、メディアは多数のまっとうな科学者の声を読者・視聴者に届けようとならないのか。なぜ、メディアは非科学的な情報を流すのか。なぜ、メディアは間違った報道を訂正しようとならないのか。子宮頸がんワクチンや遺伝子組み換え作物、ゲノム編集食品、食品添加物などの事例を基にメディアがバイアスに満ちた情報を流す背景、からくりを迫る。メディアが作り出すニュースの構図は過去 50 年間変わっていない。中高年しか読まなくなった新聞の信頼性を取り戻すために、いま何をすべきか。読みたい新聞とはどういうものかを考えてみる。

以上